

## 学童疎開の思い出

柿沼 節子（昭和 11 年生まれ）

それは今から 61 年前のことです。

東京都江戸川区小松川第四国民学校のグラウンドには、これから疎開地（山形県）に向かう学童が整列していた。校長先生や係の先生方のお話の最中、突然私が背負っていたリュックサックのヒモが片方ブツリと切れてしまった。泣き出した私を見つけた母がかけより、リュックを持ち帰り急いで修理してくれた。

その時私は 3 年生でしたが、学校から駅までどうやって行ったものか全く覚えていない。電車に乗ってからは、両親や家族との別れの辛さも忘れたようになぜかはしゃいだ気分だった。

私たち学童約 50 名が到着した疎開先は、鶴岡市から電車で少し入った国宝といわれる禪寺で、五重の塔や五百羅漢のお堂もあり、釣鐘がとても大きかった。朝夕打ち鳴らされる梵鐘の音は、ゴォ～ンゴォ～ンと山にこだまするように響き渡った。私たちが生活する部屋は、2 階の畳百枚敷といわれる広い部屋だった。引率された先生方は、勉強を教える先生 2 人と養母さんであった。

各人が家から送られた布団で休み、起床後は整列して「乾布摩擦」をした。はじめは手拭いでやっていたが、そのうち亀の子束子でやることになり、さすがに肌がヒリヒリとした。勉強は 100 畳の間に長机を並べ、3、4 年生と 5、6 年生といった複式授業となった。

その前に朝食があり、朝食の前に全員で本堂に行き「般若心経」を唱えることになっていた。毎朝唱えるので、じきに覚えてしまった。食事の支度は、ご飯炊きのおじさんがいて、他の人たちと世話をしてくれた。

朝食はぽったりとおいしく炊けた「おかゆ」が大きなお椀に 1 杯とたくあん漬が 2 切れだけだ。何故か、お昼と夜の食事の記憶がない。お正月の頃だったか、近所の人たちからお餅をいただき、お雑煮をしていただいた。餅は丸い餅だった。ごはん炊きのおじさんは、とてもユーモアがあって、いつも私たちを笑わせていた。

時折家族の人たちが面会に来た。私のところには祖母が一度たずねて来てくれた。母が自分の着物をといてモンペを縫って持たせてくれた。裏地まで付いていて、とっても暖かかった。私たちも家に手紙を書いた。そして、戦地の兵隊さんに宛てた励ましの手紙も。そんな便りを受けとった兵隊さんたちは、どうなったのでしょうか？

ある時、皇居の皇后様からといって、お菓子が皆に配られた。その袋には、お歌が添えられていた。

「つぎの世を 背負うべき身ぞ たくましく 正しく伸びよ 里にうつりて」

私たちがお世話になったお寺の裏から小さな山を越えたところに「湯の浜温泉」があり、日本海の荒波が打ち寄せていた。海水着も持たない私たちは、パンツ 1 枚で海水浴を楽しみ、海から上がると温泉のお湯で砂を落とし温まったものでした。

昭和 20 年 8 月 15 五日、遂に終戦を迎えた。私たち学童疎開の子供たちにもそのことが知らさ

れたが、子供たちの中には空襲で親を亡くした者もあったようです。

その後、次々と親元に引き取られていったが、父が私を迎えに来てくれたのは、もう秋で稲が実っていた頃だった。

その後、両親は土地を貸して下さる人があり小さな小さな家を建てた。私自身も中学卒業後、地元で働き、結婚もして、その後いろいろと苦労は多かったが、いつしか60余年の月日が流れた。

(最後に趣味の短歌を三首)

梵鐘の朝夕ひびく山の寺 子等も覚えし般若心経

父母の便りなくとも健やかに 学び育ちし国宝の寺

村人が分かちてくれし丸餅の 雑煮祝いし疎開の子たち